

—サムエル下5章・1-3、コロサイ1章・12~20、ルカ23章・35-43—

(そのとき、議員たちはイエスを)あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れぬのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」そして、「イエスよ、あなたの御国においてになるときには、わたしを思い出してください」と言った。するとイエスは、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」
—ルカ23章—

王であるキリスト 『王である』

キリストの十字架

かつてイスラエルを統一したダビデ王は、敵を殺して民を救う王でしたが、キリストは、敵の前で死んでみせる救い主『真の王』でした。

それまで、他人の不幸を救ってきたキリストが、弟子たちが固唾をのんで待っていた「今」と言う時に、敵の前で自分を救わなかったのは、なぜだったのでしょうか？

人は「死」を最も恐れます。そして自分が生き残るために敵を殺すのです。

十字架につけられたイエスを眺めて「もし神からのメシアで選ばれた者なら自分を救うがよい」とあざ笑う議員たちを前に、救う事の出来たイエスがこの時、自分を救って十字架から降りたなら、世を救うキリストの救済

は失敗に終わったのです。人類を救うために来られた救い主が真の敵としたのは、悪人ではなく、悪人の背後で、人をコントロールして罪の虜にしている『悪霊』だったからです。

悪霊は、人間が最も恐れている体の『死』を逆手にとって体に取り付き、敵は殺せ “とそそのかして人間を罪の虜にする恐るべき詐欺師です。この悪霊の存在に気づかない人類は、詐欺師の罠にはまって世界を戦争にまで駆り立て、滅亡に向かわせていることに気づくべきなのです。

イエスがそれを教えるために、身を持って十字架に登るのは、悪魔にうち勝つ最も強力な武器を私たちに持たせ人類に平和をもたらすためでした。すなわち、十字架は、罪に拘束された体を捨てて、心で神に向かう道だから

です。植物が成長し、花を咲かせ、実を結ばせると枯れて逝くように、私たちの体は、心を育てるためにあり、心を神につなげる使命を終えると、土に帰って復活を待つ、神が宿っていた神殿だったのです。神殿は壊れても三日で建て直すイエスです。未来に復活の希望を託し、今日、王であるキリストを心から祝いましょう。

2022年11月20日

主任司祭 昌川信雄

